



ムカシの競馬を読む



すだ たかお
須田 鷹雄

1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレッド、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

今から10年前、平成16年の10月という、デルタブルースが岩田康誠騎手とのコンビで菊花賞を制した月である。前走で1000万条件を勝ったばかりの馬だったが、かつては上がり馬の活躍が多かった菊花賞だけに、穴で狙ったファンも多かったようだ。

岩田騎手はこの菊花賞優勝の2日後にJRAの騎手試験を受け、後に中央所属となっている。このときの試験は北関東から内田利雄騎手と水野貴史騎手、東海公営から吉田稔騎手など16人が受験したが、最終的に合格したのは岩田騎手のみだった。

さて、この平成16年10月は中央競馬史上記念すべき出来事が起きる……はずだったのに結局は起きなかったという月でもある。まずは平成16年10月23日付の産経新聞から引用しよう。「天皇・皇后両陛下は31日に東京競馬場で開かれる第130回天皇

賞を観戦されることになった。宮内庁が22日発表した。天皇陛下が天皇賞をご覧になるのは、同賞が昭和12年に設立されて以来、初めて（以下略）」

記事中にある昭和12年というのは、各地の皇室御賞典が日本競馬会の春秋2レースに統合された時期（JRAはこれを天皇賞のはじめと定めている）を指す。しかしそれどころか、明治32年5月9日の根岸（横浜）を最後に天覧競馬というのは途絶えており、横浜で最初の皇室御賞典が行われたのはその後の明治38年である。

それゆえ天覧競馬は競馬界にとつての悲願だったわけだが、ここで悲劇が襲う。27日付の日経新聞から引用する。

「宮内庁は26日、31日に予定していた天皇、皇后両陛下の東京競馬場での秋の天皇賞レース観戦について、新潟県中越地震の被害状況などに配慮し、来秋に延期すると

発表した（以下略）」

そう、中越地震によって行幸啓が取りやめになってしまったのである。御存知のように1年後に天覧競馬は実現し、ヘヴンリーロマンスで優勝した松永幹夫騎手が印象的な敬礼シーンを見せることになる。仮にこのとき天覧競馬が実現していたとしたら、優勝騎手はオリビエ・ペリエ騎手（ゼンノロブロイ）。どんな敬礼シーンになっていたかを想像してみるのも興味深い。

続いて20年前の平成6年10月。この月には競馬の国際化とともにそれまで想定していなかった事態が起きることが分かった。

事の起りは凱旋門賞と同時に行われたオペラ賞である。記事から引用すると長くなるのでかいつまんで説明すると、まずオペラ賞で武豊騎手が騎乗するエリンバード（後のオークス馬エリコンコート之母）が1位入線した。しかし、他騎手からのアピールで5着に降着となつて

しまつた。

ロンシャンで下された裁決は4日間の騎乗停止。当初は仏国内で消化されるこの噂だったが、確認したところ実効は帰国後になるとのこととて、翌週行われる京都大賞典などへの騎乗ができなくなる見通しだった。

京都大賞典では有力馬のナリタタイシンに騎乗予定だったが、エリンバード陣営が異議申し立てを行つたため制裁は暫定的に凍結され、騎乗が可能に。ところがナリタタイシンが状態不安で回避してしまい、京都大賞典ではジャムシードに騎乗……とこのあたりからはルール論と別な話になってくるのだが、いずれにしても、制裁の話とはいえ世界の競馬と日本の競馬が繋がりは始めていることを感じさせる出来事だった。

この10月にはグリーンチャンネルの試験放送も始まっている。25日付の日経夕刊から。

「関係者の注目を一身に集める馬がいる。きょう17日、静内家畜センターで開かれるアラブ当歳秋セリに登場するエルシンドボーイ（牡、父エルシンド、母イナリトウザイ）だ。あのハギノカムイオーは1億8000万円で落札され世間を仰天させたが、この馬は『お台』が2億円というのだから驚き」

アラブの当歳に2億円とは時代を感じる。アングロアラブは血統が良ければ走る確率が高いため、名牝イナリトウザイの仔となれば種牡馬価値を含めこのくらいの値段がついても不自然ではなかったようだ。

ただ、セリでは結局主取り。血統名エルシンドボーイは競走名イナリスターとして、生産者自身が馬主となつて大井で走らせることになった。

イナリスターは競走馬としては1戦のみ、しかも3着だけで引退となつてしまつたが、種牡馬になつてからはタマツバキ記念優勝馬のレッドコーラル、浦和・シルバークップ優勝馬ゲートウエーキング、中津・アラブ優勝優勝馬ベルグランデといった産駒を出した。アラブ競走の退潮もあつて種牡馬として2億円は稼げなかっただろうが、産駒成績としては立派なものである。

ムカシの競馬を読む

平成16年・京都競馬場
菊花賞
優勝馬：デルタブルース

© JRA



「10月に開局した競馬中継を中心とした有料のCS（通信衛星）テレビ『グリーンチャンネル』の受信希望者が急増している。希望者数に受信機の数が増いつかず、受信できるまでの予約待ちが2万人近くになっている。不振が続く業界だけに、既存のCSテレビ局は競馬ファンがほかの専門チャンネルにも興味を示すことに期待を寄せている」

当時のグリーンチャンネルは電話投票会員限定のサービスで、ケーブルテレビ経由ならば通常の契約で受信できるが個人受信だと専用のチューナーが必要だった。いまのように2チャンネルではなく、1チャンネルで料金は税別月2000円（現在は月1200円）。それでも受信希望者が後を絶たず、受信機の生産が間に合わずに万単位の競馬ファンが契約待ちをしていたというのだからブームの勢いが分かる。ボヤキ話になるが、当時の制作予算は単発番組がいまのワンクル予算に近いくらいあったという。その時代に仕事させてほしかった……というのがいまのグリーンチャンネルに出入りする者の本音だ。

最後に、今から30年前、昭和59年の10月。この月にはひどい事件が起きている。まずは10月2日の東京新聞の記事から引用しよう。

「牧場経営者らが競走馬に毒物を注射して殺し、保険金2000万円をだまし取つていたことが分かり、北海道静内署は1日、（筆者注：犯人3名）を詐欺と私文書偽造、同行使の疑いで逮捕した。競走馬を殺して保険金をだまし取つた事件の摘発は全国でもはじめて」（前略）北海道浦河郡浦河町の牧場主からタカイカブト57号を45万円で購入。保険をかけたうえ預けていた新冠町内の牧場で殺し、保険金を請求する際には信用させるため、1000万円で購入したように偽造した売買契約書まで提出していた」

後に追跡取材した内外タイムスによると、売買契約書の偽造は保険をかける前に行われたようだが、「タカイカブト号は将来シンジケートが組まれる予定。株主もすでに十数人集まつた」とデッチあげていたとのこと。しかし同馬は近親にもほとんど活躍馬のいない血統だったうえ、保険会社の送った獣医が契約時・死亡後調査時とも同一人物だったため、状況の不自然さに気付かれて発覚したようである。そうでなくとも馬産地の噂などは駆け巡るもの。どのみちいずれは発覚したのではないだろうか。

同じ馬産地の話題でも、派手なのはこちら。17日付の中日スポーツ